

守り抜かれた信仰

日本へキリスト教を伝えたのは1549年、フランシスコ・ザビエルでした。彼はインドのマラッカにいたとき、アンジローという日本人に出会い、その聡明さに心打たれ、日本への布教を決意しました。鹿児島に上陸し、山口、堺、京都と布教の旅を続け、2年3か月して離日しました。特に九州ではキリスト教徒になる大名(キリシタン大名)も現れました。高山右近のように信仰を貫いて1614年マニラへ追放されましたが、多くの大名は南蛮貿易の利益を目当てに入信したのです。(河合敦著「日本史」p、168より)

1637年、島原で天草四郎を首領として農民二万人が反乱を起こしました。この鎮圧に幕府は苦慮し、鎖国制度を強め踏み絵、拷問によって改宗を迫りました。また、賞金を出して隠れキリシタンを密告させたり、連帯責任制度を設けて相互監視させたりしました。このような諸政策によってキリスト教徒は根絶したかに見えましたが、1865年長崎に大浦天主堂が創建されたとき、浦上村の人々は宣教師プティジャンに「自分たちはキリスト教徒である」と告白したのです。プティジャンはこのことを「キリシタンの復活」と讃えたが、「約300年間の厳しい弾圧に耐えて、父祖の信仰を守り抜いたというのは、まさに奇跡的な出来事といってよいだろう。」(河合)

(山下誠也)